



【住 所】東京都板橋区大谷口上町30-1

【病院長】澤 充 先生

【病床数】1,037床

【スタッフ】消化器肝臓内科23名、指導医4名、専門医(指導医を含まず)6名、看護師6名

【内視鏡検査・治療総数】(平成20年度) 8,291件(上部消化管 5,342件、下部消化管 2,665件、ERCP 284件、他)

【保有内視鏡総数】上部用 12本、下部用 7本、十二指腸スコープ2本

臨床・研究・教育をバランス良く提供し 優れた指導医の育成を目指す

● 関連施設も含めた年間の外来患者数は延べ15万人より高度な内科的治療を地域へ提供

日本大学医学部附属 板橋病院は、人口約53万人を擁する首都圏の生活都市である板橋区に位置し、高度先進医療とそれを支える研究開発や医療研修の提供を根幹とし、救命救急機能を備えた特定機能病院として発展してきました。病診連携が進んでいるため紹介患者が多く、区内はもちろん隣接する練馬区や北区、さらには埼玉県から来院される患者様も少なくないそうです。

同院では消化器外科で多くの肝臓外科手術をてがけていること、また消化器・肝臓内科教授の森山光彦先生が肝臓分野の第一人者であることなどに起因し、消化器・肝臓内科においても肝胆膵領域の内科的処置を目的とした紹介患者が非常に多いのが特徴です。慢性C型肝炎に対するインターフェロン療法や、慢性B型肝炎に対する核



内視鏡室長
水野 滋章 先生

酸アナログ製剤をはじめとする抗ウイルス療法は早くから導入されており、中でもインターフェロン療法については現在までに約2,200件の実績があります。また、ドレナージ等を目的とした治療ERCPも積極的に行っており、EMRやESD、胃食道静脈瘤治療などを含めた治療内視鏡の件数は年間で1,500件を超えています。

● 和気藹々とした風通しの良い職場環境で優れた内科医としての総合力を身につける

消化器・肝臓内科では、「優れた内科医の育成ができる指導医を育成する」ことをモットーに、臨床で総合的な知識と技術を発揮しながら、後輩を指導できる人間力を有する医師を育成することを使命としています。同科では、研修医は最初の1ヶ月間は内視鏡の洗浄や咽頭麻酔、内視鏡生検の介助などを中心に内視鏡業務全般を経験し、後に上部内視鏡検査を約1年間行います。2年目移行は大腸内視鏡、さらにERCPを経験し、最終的に一人で一通りの検査や治療が行えるようになるまでには約6年を要するそうです。内視鏡室長の水野滋章先生は、「特定分野のスペシャリストを養成するというよりも、上部・下部・肝胆膵領域すべてにおいて幅広いスキルを習得してもらおうようにしています。大学病院では臨床だけでなく研究や教育にも時間と労力を要しますので、風通しが良く、楽しく意欲的に日々の業務に取りくめる環境づくりを心がけています」とお話になりました。同科では女性医師の活躍も目立ちますが、これも男性医師と全く同じ教育・研究・臨床研修の機会を提供し、一人ひとりをじっくりと一人前の医師に育成するという、同科のポリシーが生んだ結果だと思われます。内視鏡カンファレンス、胃・十二指腸造影や注腸検査の読影会、肝疾患の症例検討会はそれぞれ週に1回行われており、さらに消化器外科との合同カンファレンスも月に2回実施されています。その他先進技術を研究するテーマ別の研究会や勉強会も月に1度のペースで実施されており、同科では一人の研修医がこれらの経験を通じて約10年で立派な指導医に成長し、10年目を以降は指導医として臨床医の育成に貢献することを目指しています。

安全で確実な内視鏡治療を行うため 医師とスタッフが協力してリスクマネジメントを実施

多くの検査や治療に対応するため、消化器・肝臓内科はスタッフの連携を強化し、徹底した安全管理を実践しています。内視鏡の洗浄・消毒については、消化器内視鏡学会のガイドラインに準拠し、症例間消毒を徹底して感染管理に努めています。また、大腸ポリペクミー

や胃のESD等についてはクリニカルパスを医師とコメディカルが協力して作成し、リスクマネジメントを徹底しています。内視鏡処置具についても Disposable 化を推進し、現在ではスネアの全面 Disposable 化を進めているそうです。



消化器・肝臓内科のみなさん